

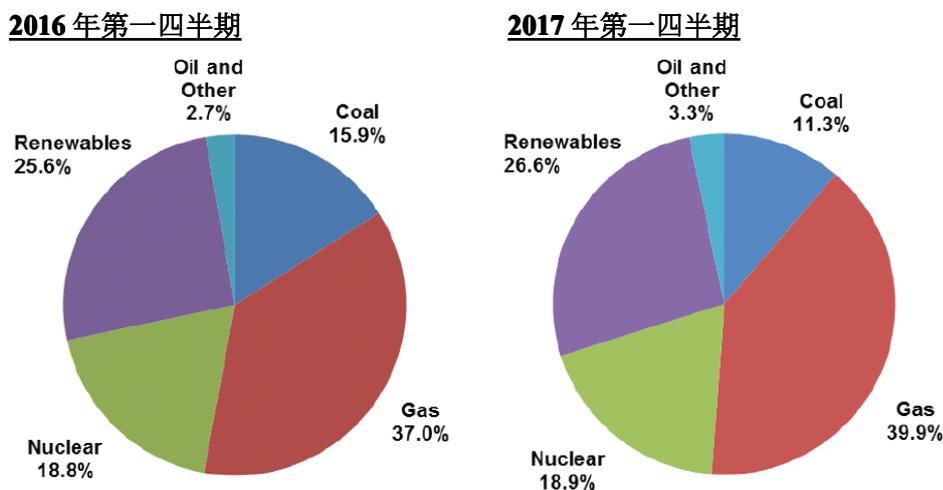
英国の2017年の再エネ発電量をリードする陸上風力の記録的な伸び！

6月29日に発表された政府のニュースリリースによりますと、今年の第一四半期の総発電の1/4以上を再生可能エネルギーが担っています。この内、陸上風力発電のシェアは8.3%となり、これは2016年第1四半期と比較して、発電電力が20.2%も増加し記録的な伸びとなりました。

再生可能エネルギーは、2017年1月から3月にかけて総発電の26.6%に、去年より1%増加し、石炭による発電は15.9%から11.3%に減少しました。2015年第一四半期の石炭発電が総発電の30.8%だったので、英国のクリーンエネルギーへの移行は急速に進捗しています。

英国の2017年第一四半期の総発電の原子力発電を含むすべての低炭素電源は、45.5%に達し、昨年と同じ時期より1.1%増加したことになります。

英国の総発電に占める電源別構成比



政府の外郭団体 Renewable UK の専務理事ピンチベック女史は、次のように述べています。「再生可能エネルギーはこれまで以上に高度な技術力で安価な電力を生んでいます。この、私たちの革新的な産業は、英国の25%以上がクリーンな持続可能な電力を確実に提供できるまでに成熟して来ています。私たちが最も必要としている時期に、陸上風力発電が記録的に増加したのは素晴らしいことです。」政府の諮問機関である「気候変動に関する委員会 (CCC - Committee on Climate Change)」の「2017年報告会議」からも、この件が政府刊行物としても発表されました。

CCCは、「風、波、潮力を利用するなど、気候変動に対処するための現実的な措置を取るために、英国がこれまでに行ってきた Action Plan に基づいた施策は、高く評価できる。」とコメントしています。また、メイ政権の政府は、CO2排出量が減少し続けることを確実に実行できる行動をとるよう求めています。新しく気候変動大臣になったクレア・ペリーは、大胆かつ野心的な新しいクリーン成長計画を発表する予定であること示唆しています。

英国は、政権政党が変わっても、環境政策の基本理念は変わらず、総発電に占める再生可能エネルギーの割合を2014年は19.1%、2015年は24.6%、2016年は25.6%、2017年のQ1で26.6%と、確実に進捗させており、国の2020年の目標値31%は達成可能ではないかと思われます。

翻って、日本を見てみますと2016年の再生可能エネルギーの総発電にしめる割合は、14.9%（内訳：水力7.6%、太陽光4.4%、バイオマス1.9%、風力0.8%、地熱0.2%）で、水力を除くと7.3%です。日本は海洋大国であり洋上風力発電や潮力、波力、海流、海水の温度差発電等のポテンシャルは膨大で、また火山大国でもあるので地熱発電や国土の70%を占める豊富な森林資源を活用しての木質バイオマス発電、と日本列島が持つ「地の利」の活用が十分になされていないのが現状であります。

そろそろこの辺りで、政官学民が一致団結して、日本人の英知と技術を持ってすれば、総発電に再生可能エネルギーが占める割合を2020年に30%、2030年に40%、と言う高い目標を定め、これを実行に移すことは可能ではないかと思えます。

これを実行する一つの方策例として、英国が大胆に行っている国際入札による民間資本の活用等、思い切ったエネルギー政策の転換が必要ではないでしょうか。（了）